

「友達100人呼べるかな」

あらすじ

倉田実帆（28）は、婚約者の遠藤友哉（28）との結婚式を控え、幸せの絶頂、のはずだった。実帆には大きな気がある。それは、結婚式に招待する友人が一人もないこと。実帆は卒業や就職を機に、それまでの友人との繋がりを断ち切ってしまう、「人間関係リセット症候群」なのだ。

友人が多い友哉にそのことを打ち明けられず、実帆が頼ったのは友人代行サービスだった。そこで、十年前にリセットした友人、木内瑞希（28）と再会する。動揺する実帆に対し、瑞希はあくまで仕事という姿勢を崩さない。

二人の溝は埋まらないまま、着々と結婚式の準備が進められる。実帆は、友哉や母が友人に囲まれているのを見て、瑞希との関係をリセットしたことを後悔し、瑞希に今までの思いを打ち明ける。高校卒業後、瑞希と連絡を絶ったのは、実生活がうまくいかず、惨め

になった自分を見せたくなかったからだだった。何も言わずに消えてしまい、申し訳なかったと謝罪するが、一方的に関係を切られた瑞希は納得しない。関係を修復しようとした実帆の申し出も拒絶してしまう。

失意の中迎えた結婚式当日、本当の友人に囲まれる友哉に、実帆は気まずさを感じる。友人代表のスピーチも、役としての瑞希の言葉に、後悔ばかりが募る。だが、サプライズで瑞希が用意したスライドショーには、実帆が消してしまった二人の思い出が詰まっていた。瑞希はずっと実帆との思い出の写真を残していたのだ。瑞希の思いに気づいた実帆は、改めて瑞希と友達に戻りたいと伝える。瑞希も素直になり、二人は友達に戻った。今度こそ、おばあちゃんになっても、ずっと友達でいようと誓うのだった。

登場人物

倉田 実帆 (28) 会社員

木内 瑞希 (28) 実帆の元友人

遠藤 友哉 (28) 実帆の婚約者

辻崎 宏武 (32) 友人代行サービスの

代表

倉田 明子 (55) 実帆の母親

○マンション・リビング（夜）

ノートパソコンの画面をじっと見つめて  
いる倉田実帆（28）。

遠藤友哉（28）、入って来る。

友哉「実帆ー、俺の分できたよ」

実帆、慌ててノートパソコンを閉じる。

友哉、実帆に分厚い紙の束を渡す。

友哉「これが俺が呼ぶ人のリスト。いやあ、  
思ったより多くなっちゃったな。でもみんなに  
祝ってもらいたいよね。だって一生に  
一度なんだよ？ 結婚式なんて」

実帆「そう、だね」

友哉「新郎新婦でゲストの人数は揃えましょ  
うなんて言うけど、実帆は別に俺に合わせ  
なくていいからね」

実帆「本当？」

友哉「うん。いくらでも呼びなよ！ 百人だ  
っていいよ！」

実帆「……ありがとう」

友哉「うん。じゃあ俺先寝るね。実帆も早め

に招待客リスト出してね」

実帆「分かった。おやすみ」

友哉、出て行く。

実帆、ノートパソコンを開く。

画面には何も打ち込まれていない。

○雑居ビル・エントランス

実帆、周囲をキョロキョロ見渡しなが  
ら入って来る。

○同・事務所

辻崎宏武（32）、実帆にお茶を出す。

実帆「結婚式の代理出席もできるんですよね。

……レンタルフレンドって」

辻崎「もちろんです。弊社友人代行サービス

ニコニコフレンドで人気のサービスですよ」

実帆「婚約者にバレたくないんですけど……」

辻崎「お任せください。完璧なレンタルフレ  
ンドをご用意いたします」

実帆「何人くらい派遣してもらえるんですよ

う」

辻崎「何人でも対応できますよ。百人だって大丈夫です！」

実帆「よかった。一人もないんで、友達」

○同・入口前

実帆、出て来る。

スマホの着信音。

実帆「（電話に出て）もしもし？」

○一軒家・リビング

電話をしている倉田明子（55）。

明子「実帆？ お母さんだけど」

○繁華街

明子（電話）「結婚式の準備は順調？」

実帆「あー……」

実帆、持っていた名刺を見る。

『ニコニコフレンズ代表 辻崎宏武』  
と書いてある。

実帆「うん」

○一軒家・リビング

明子「真知子おばさんとこね、みんな来れる  
って」

実帆（電話）「そう」

明子「そういえばお友達は誰呼ぶの？」

○繁華街

明子（電話）「瑞希ちゃんとか仲良かったね  
え。元気なの？」

× × ×

（フラッシュ）

セーラー服姿の実帆（二〇）と木内瑞希  
（二〇）、楽しそうに話している。

× × ×

実帆「……ちよっと忙しいから切るね」



明子（電話） 「はあい、またね」

実帆、電話を切りため息をつく。

○会社・給湯室

上司 「婚姻届は結婚式の出すんだっけ」

実帆 「はい」

上司 「いいねえ、新婚さん。懐かしいなあ」

実帆 「あの、本当に会社の方招待しないでいいんですかね」

上司 「いいのいいの。慣例になってるから。」

前の会社の人とか来るの？」

実帆 「いえ」

上司 「いいじゃん。その方が気楽でしょ？」

友達に囲まれてさ、祝ってもらおう。それが一番でしょ」

実帆 「……そうですね」

○マンション・リビング（夜）

電話をしている友哉。

友哉 「うん、よろしくー。はい」

友哉、電話を切る。

実帆「友達？」

友哉「うん。高校の時の。披露宴でスピーチしてくれるって。実帆の方は決まった？」

実帆「へ」

友哉「それぞれ友人代表でスピーチしてもらおうって話してたじゃん」

実帆「あ、そうだったね」

友哉「一番の親友に頼んだんだ。実帆は？」

実帆「私も、一番の親友に」

○雑居ビル・事務所

辻崎「もちろん、友人代表のスピーチも承ります。オプションにはなってしまいましたが」

実帆「お願いします」

辻崎「事前に打ち合わせして、スピーチの内容を固めましょう。あたかも大親友からのように」

実帆「はい」

辻崎「バッチリなスタッフがいますよ。うち

のエースなんですけど、ちょうど倉田様と  
同世代で」

ドアが開く。

入ってきたのは、木内瑞希（28）。

辻崎「あ、いいところに。こちらがそのスタ  
ッフなんですけど」

目が合う実帆と瑞希。

× × ×

（フラッシュ）

セーラー服姿の実帆（18）と木内瑞希

（18）、楽しそうに話している。

× × ×

硬直する実帆。

辻崎「早速打ち合わせに入りましたよ。瑞  
希君、よろしく」

辻崎、席を外す。

瑞希、実帆に名刺を差し出す。

瑞希「ニコニコフレンドスタッフの木内と申

します」

実帆、恐る恐る名刺を受け取る。

瑞希「結婚式に呼ぶご友人がいないと」

実帆「はい……」

瑞希「本当はいたんじゃないんですか」

実帆「え」

瑞希「いたけど、捨てたんじゃないんですか」

実帆「あの、私……。ごめんなさい」

実帆、走って出て行く。

辻崎「え、倉田様！」

### ○ 繁華街

走っている実帆、息遣いが荒い。

### ○ 雑居ビル・事務所

辻崎「何、どうしたの」

瑞希「友達でした」

辻崎「え？ いるんじゃない、友達」

瑞希「友達、でした。元ですよ。もう過去の  
話です。縁切られたんで」

辻崎「何で？」

瑞希「分かりません。高校卒業してからある日突然、連絡が取れなくなっただんです」

辻崎「それから会ってなかったの？」

瑞希「彼女は地元から出て進学したんで。社会人になってから偶然同じサークルだったって人と会ったんですけど、その人も追いかコンのあとで彼女の連絡先が消えちゃってたって」

辻崎「ふうん。人間関係リセット症候群、というやつだね。突然それまでの交友関係を断ち切ってしまうという」

瑞希「リセットされた方はたまったもんじゃないですよ」

### ○ 繁華街

走っていた実帆、咳き込み立ち止まる。

### ○ (回想) 高校・教室

実帆(18)・瑞希(18)、喋っている。

瑞希「うちらおばあちゃんになってもさ、友達でいよーよ」

実帆「（笑顔で）うん！」

指切りする実帆と瑞希。

○（戻って）繁華街

実帆、小指を見つめる。

○マンション・リビング

身支度をしている実帆。

友哉、入って来て、

友哉「あれ、どっか出かけるの？」

実帆「あー、うん。ちよつと実家に」

友哉「え、そうなの？俺も行くよ」

実帆「大丈夫！ほらあの、お母さんが実家の荷物片づけてほしって」

友哉「ならなおさら一緒に行って手伝うよ」

実帆「ほんと！大丈夫だから」

友哉「あ、もしかして向こうで友達と会うの？」

実帆「そう！ そうなの！」

友哉「じゃあ邪魔しちや悪いか。ごめんね」

実帆「ううん」

友哉「でもいつかは会いたいな。実帆の友達。

まだ紹介してもらったことないよね？」

実帆「みんな忙しいから」

友哉「じゃあ結婚式のときかな。楽しみ」

実帆「そんな期待するほどの人脈は」

友哉「だって友達ってその人の人生そのもの

でしょ。会ってみたいよ」

実帆「……行ってきます」

友哉「行ってらっしゃい」

○一軒家・子ども部屋

明子「帰って来るならご飯作ってたのに」

実帆「荷物取りに来ただけだから」

明子「荷物？ 何の」

実帆「結婚式でいろいろ使うやつ」

実帆、本棚から卒業アルバムを取り出す。

○ 駅・改札前

改札から出て来る辻崎・瑞希。

辻崎、実帆に気づいて、

辻崎「倉田様」

実帆「すみません、わざわざ遠くまで」

辻崎「いえいえ。よりリアルな友達作りには

倉田様のルーツはヒントになりますから」

実帆、チラッと瑞希を見る。

瑞希「本日はよろしくお願いいたします」

瑞希、実帆に頭を下げる。

実帆、慌てて頭を下げる。

辻崎「さ、行きましようか！」

○ 公園

風景の写真を撮っている瑞希。

実帆「ここが通学路です」

辻崎「ふんふん、なるほど」

○ 住宅街



辻崎「この辺で遊ぶって言ったらどこへ？」

実帆「それは」

○ショッピングモール・店内

辻崎「こちらでよく遊んでいらっしやっただすか」

実帆「はい。放課後はだいたい」

辻崎「当時のお写真ってあったりしますか？」

よりイメージを掴みたくて」

実帆「えっと」

実帆、瑞希から目をそらす。

実帆「全て、消してしまっただ」

瑞希、実帆を見ずに周辺の写真を撮る。

○同・カフェ

辻崎「お願いしてたものって」

実帆「はい、持ってきました。小学校のいでい

いんですよね」

実帆、バッグから卒業アルバムを取り出す。

辻崎「ありがとうございます。今回は実在の人物になりきって派遣させていただきます。よりリアリティが出ますので」

実帆「はい」

辻崎「小学校の同級生でしたら成長してますし、多少顔が違っても別人と疑われることはないかと」

辻崎、卒業アルバムのページをめくる。

辻崎「この中で今でも親交がある人は」

実帆「いません。携帯を持ったのは高校からですし、同じとこに進学した子もいなくて」

辻崎「成人式とかでも会ってないですか？」

実帆「はい。行かなかったの」

辻崎「なるほど。そういえば受付けてお友達にお願いするような形ですか？」

実帆「彼は、そういうふうには考えてるみたいですよ」

辻崎、ページを指さして、

辻崎「では伊藤桃菜ちゃん、大久保里香ちゃんに担当させましょう。こちらもおプシヨ

ンで別途かかりますがよろしいです？」

実帆「大丈夫です」

辻崎「で、スピーチ担当のこちらの木内には、えーっと和田心ちゃんになってもらいますので」

実帆「えっと」

実帆、瑞希をチラッと見る。

瑞希「大丈夫ですよ。仕事なんで」

実帆、うつむく。

辻崎「スピーチのためにいくつかお伺いしたいんですけど、小学生のとき好きな教科って何でした？」

実帆「体育が」

○ 駅・改札口（夕）

辻崎「本日はありがとうございました」

実帆「ありがとうございます」

辻崎「スピーチの原稿でき次第、案としてお送りさせていただきますんで」

実帆「よろしく願いします」

辻崎「では失礼します」

辻崎・瑞希、改札を通る。

× × ×

(フラッシュ)

瑞希(一応)、改札を通りこちらに手を振る。

× × ×

瑞希、振り返らずに駅構内を歩いていく。

実帆、うつむく。

○電車内

辻崎「今回の案件は外れるのかと思ってた」

瑞希「仕事ですから」

辻崎「ふうん」

辻崎、にやついて瑞希を見る。

瑞希「何ですか」

辻崎「これがきっかけでまた友達に戻れると

いいね」

瑞希、窓の外を眺める。

○マンション・玄関（夜）

実帆、入って来る。

玄関で靴を履いていた友哉。

友哉「あれ、おかえり。早かったね。てつきり向こうでご飯食べて来るのかと」

実帆「あー、今日はちよつと」

友哉「お友達都合付かなかった？」

実帆「うん。出かけるの？」

友哉「ごめん、実帆遅くなると思って、飲み

誘われたから行くなって返事しちゃった」

実帆「そっか。行ってらっしゃい」

友哉「そうだ。実帆も行こうよ」

実帆「え」

友哉「ちょうどみんな結婚式に呼ぶ奴らだし。

行こー！」

実帆「あの」

友哉、実帆を連れて出て行く。

○居酒屋・店内（夜）

男1「友哉結婚おめでとうー！」

乾杯する一同。

男2「こんなきれいな奥さんもらうなんてな」

男3「紹介が遅いぞー」

友哉「お前らがスケジュール合わないんだろ」

男1「友達に紹介されたのは初めて？」

実帆「あ、大学のお友達とかには何回か」

男1「友哉も実帆さんの友達に会ったの？」

友哉「俺はまだ。なかなか都合付かなくて。

ね」

実帆「うん……」

男2「こらいチャつくなー」

男3「俺彼女と別れたばっかなんすけど誰か

いないですか？」

友哉「はいはい、式の時かな？ 待ってって」

苦笑いする実帆。

×  
×  
×

だいぶ酔いが回った様子の一同。

男1「実帆ちゃん、ほんとね、こいつはいい

奴なんですよ！」

男1、友哉の肩に抱きつく。

友哉「おいおい」

男1「高校ん時もね、俺が部活で」

男2「はいはい、その続きは本番でな」

男3「ネタバレなるだろ」

友哉「こいつにスピーチ頼んだから」

男2「こいつ原稿用紙五枚くらいになってた

よ

友哉「長い長い」

男1「だってお前との思い出がさあ」

○繁華街（夜）

友哉「ありがとうね、付き合ってくれて」

実帆「ううん、全然」

友哉「いい奴らでしょ？ うるさいけど」

実帆「うん」

友哉「早く実帆の友達にも会いたいな」

実帆「……うん」

友哉「そういえばあいつら余興もやってくれるらしいけど、実帆も友達に何かお願いするの？」

実帆「え」

○雑居ビル・事務所

辻崎「もちろん、余興もお任せください！」

実帆「あの、料金って」

辻崎「まあ内容にもよるんですけども、例えばダンスだとかは」

辻崎、パンフレットを差し出す。

実帆「（パンフレットを見て）なるほど」

辻崎「普段はプロとしてやってるスタッフを派遣することになるので少しお値段は。その分、クオリティは申し分ないかと！」

電話の着信音。

辻崎「ちよつと失礼」

辻崎、電話を取りに行く。



実帆、パンフレットを見つめ、指折り  
数えて計算している。

辻崎「え、それやばいじゃん！」

ビクツとする実帆。

電話を受けて焦っている様子の辻崎。

辻崎「えー、どうすんのよ。瑞希君、なんと  
かできない？ だよねえ」

様子を窺っていた実帆と辻崎の目が合  
う。

辻崎「……あ、ちよつと待ってね」

辻崎、ゆっくりと実帆に近づく。

辻崎「あの、倉田様」

実帆「は、はい」

辻崎「ご相談が」

○カフェ・店内

瑞希「あ、こっちこっちー！」

瑞希、実帆に向かって手を振る。

瑞希の前には二人の男が座っている。

瑞希「お待たせしました、こちらが友達の」

実帆「赤坂あかねです」

瑞希、後ろを向いて実帆に耳打ちする。

瑞希「辻崎から話は聞いてますね。私たちは右の男性の女友達です。私は港みなみ。あなたは赤坂あかね。二人とも外資系で働くキャリアウーマン、大学時代はミスキャンパスです」

〇（回想）雑居ビル・事務所

辻崎「お願いします！ 急に欠員が出てしまつて」

実帆「無理です、私がレンタルフレンドなんて」

辻崎「現場には瑞希君がいます。彼女はプロですから！ フォローはばっちりかと！」

実帆「ええ……」

辻崎「お願いします！ もう他のスタッフも出払ってるんですよ。そうだ！ こちらの余興オプシヨン代、タダにしますから！」

辻崎、実帆に頭を下げる。

実帆「ええ……」

○（戻って）カフェ・店内

瑞希、男たちの方に向き直って、

瑞希「この子昔っからそうなんですよー。お  
つちよこちよいで。ね」

実帆「う、うん」

瑞希「大学のミスコンのときもそうでえ」

男4「へえ。いやあそれにしても、こんな素  
敵な女性と知り合いなんて。お前もやるな

あ  
」

男5「そう？ こいつなんて酒癖悪いけどね」

瑞希「もうやめてよ」

慌てて合わせて笑う実帆。

瑞希「でも隆って私たちにも紳士で。この  
前みんなでキャンプ行った時も、ね？」

実帆「う、うんうん！ そうそう！」

男4「お前がねえ」

男5「まあな」

得意げな顔をする男5。

瑞希「この間のバーベキューも」

実帆、瑞希を見つめる。

○カフェ・店前

一同、出て来る。

男4「どうする？ このあと飲みにも行き  
ますか」

瑞希「あ、ごめんなさ〜い。私たちエステ予  
約しちゃってて」

男4「え〜、残念だなあ。じゃあ今日は二人  
で飲むか！ もっと話聞かせるよ〜」

瑞希「は〜い、いってらっしゃい」

男4・5、歩き出す。

男5、こそつと振り返り、「ありがと  
うございました」と口を動かす。

瑞希、歩き出す。

実帆、慌てて追いかける。

実帆「あの」

瑞希「すみませんでした、無理言って」

実帆「いや、全然。なんかすごいね。本当

の友達みたいだった」

瑞希「仕事ですから」

実帆「どうしてこういう仕事してるの？」

瑞希「……」

実帆「ごめん、急にこんなこと」

瑞希「世の中には、友達っていうのを必要と  
してる人がいて、その理由もいろいろだか  
ら。いろいろ知れば、いろいろ分かるかな  
って」

瑞希、実帆を見る。

きよとんとしている実帆。

瑞希、実帆から視線を外して、

瑞希「まあ今回のクライアントは全然分から  
ないですけど。学生時代の友人に見栄を張  
りたいからって。正直安くないお金出して、  
何がしたいのか理解できません」

実帆「……私は、なんとなく分かるかな」

瑞希「え？」

実帆「たぶん、現状に満足いってなくて、で  
もそれを友達に見せるともって惨めに感じ

ちやうから。楽しかった頃の自分のままで

友達に会いたかったんじゃないかな」

瑞希、実帆を見つめる。

実帆「そう、思う」

瑞希「……でも——」

辻崎の声「あ！ お疲れ様ですー！」

辻崎、二人に駆け寄って来る。

辻崎「いやあ、申し訳ございませんでした。

大変助かりました！」

実帆「いえ、全然」

瑞希「シフトちゃんと見直してください」

瑞希、辻崎と実帆を置いて歩いていく。

辻崎「こちら、よかったら」

辻崎、実帆に菓子折りを渡す。

辻崎「では」

辻崎、実帆にお辞儀して瑞希を追いかける。

実帆、瑞希の後ろ姿を見つめる。

○マンション・リビング（夜）

お菓子を食べている実帆。

友哉「どうしたの、これ」

実帆「あ、もらった。ちょっと仕事で」

友哉「ふうん。食べていい？」

実帆「うん」

実帆、テレビに視線を向ける。

アナウンサーの声「孤独を感じるという高齢者が増えています。そのまま孤独死に繋がるといふ危険性も」

友哉「うー、怖いね」

実帆「ああ、うん」

友哉「やっぱり友達って大切なんだな。年取ってひとりぼっちって嫌じゃん。まあ俺には実帆がいるけど」

友哉、実帆の隣に座る。

友哉「でも実帆にはずっと友達に囲まれてほしいかな」

実帆「え？」

友哉「だってもし俺が先に死んじゃって、実帆がひとりぼっちなんて不安すぎるよ」

実帆「そんな」

友哉「でもいい友達がいるみたいだから安心」

友哉、実帆の膝に頭を乗せる。

友哉「もちろん長生きするけどね？　もしも  
の話。なににせよ友達はいたほうがいいよ  
ねって」

実帆「……そうだね」

○駅前

走って来る実帆。

実帆「お母さん」

公衆電話の横にいた明子、実帆に気づ  
いて、

明子「実帆。ごめんね」

実帆「携帯忘れて迷子になるなんて」

明子「娘の番号は覚えててよかった」

実帆「お友達と待ち合わせだった。何時？」

明子「十二時」

実帆「じゃあ行くよ」



○ 駅構内

実帆「いつもの人たちだっけ」

明子「そう。さっちと良子とまーやん。西

高花の四人組」

実帆「ずっと仲いいんだね」

明子「まあね。一生の財産よ、友達って」

女の声「あっ、あっきー！」

中年の女性三人組が手を振っている。

明子「ああ！ いたいた。ありがとうね。お

礼にいっぱい奢るよ」

実帆「私も予定あるから」

明子「何、実帆も友達と待ち合わせ？」

実帆「……うん」

明子、女性三人組に駆け寄る。

仲良さそうに話す一同。

実帆、その様子を見届けて歩き出す。

○ 雑居ビル・事務所

実帆、入って来る。

デスクにいた瑞希と目が合う。

実帆「あ……」

瑞希「お待ちしておりました。どうぞ」

実帆、瑞希に促されて席に着く。

瑞希「辻崎は別件で外出しておりますので、  
打ち合わせは私が担当させていただきます」

実帆「はい」

瑞希「まずこちらですが、スピーチの案が完  
成しました」

瑞希、実帆に原稿用紙を渡す。

瑞希「ご確認ください」

実帆、原稿用紙を読む。

瑞希「弊社で使用しているテンプレートに、

倉田様のエピソードを盛り込みました」

実帆「いいと、思います」

瑞希「ではそちらで進めさせていただきます  
す。次に式当日ですが」

実帆「――あの！」

瑞希、実帆を見る。

実帆「――本当にごめんなさい」

実帆、頭を下げる。

瑞希「内容に何か不満がありましたか。では修正いたしますので」

実帆「急に、連絡先を消してしまつて」

瑞希「……」

実帆「瑞希のこと、嫌いになつたとかじゃないの。実はあの時、私」

実帆、一呼吸置いて、

実帆「上京したばかりで、周りに馴染めなくて、思い描いていた生活には程遠くて。地元の大学で楽しそうにしてる瑞希を見てたら」

○（回想）大学・講義室

一人端の席に座っている実帆（18）、携帯電話を見ている。

画面には瑞希（18）が友達と映っている写真。

○（戻って）雑居ビル・事務所

実帆「自分が惨めに思えて。それで、連絡先

全部消したの。前の自分を知ってる人を、全部消したくて。その繰り返しだった。卒業とか、転職のタイミングで連絡先消して」

実帆、うつむく。

実帆「気づいたらひとりぼっち」

瑞希、黙ったまま実帆を見ている。

実帆「でも私たちまた――」

瑞希、スマホを操作して実帆に見せる。

画面には女性の出産報告のSNS。

友達に囲まれていて、その中には瑞希もいる。

瑞希「佐奈、赤ちゃんが生まれたの」

実帆「え、あの佐奈が？」

瑞希、スマホを操作する。

瑞希「七海は夢だった通訳になったし、穂香は克樹と結婚した」

スマホ画面には次々と写真が映し出される。

実帆「みんな、そうだったんだ」

瑞希「加奈子は去年手術受けたの。子宮の病

気で」

実帆「え。大丈夫なの？」

瑞希「手術は上手くいったけど、気持ち的に落ち込んだじゃってね。高校のメンツでよくお見舞いに行ったよ。……実帆に会いたがってた」

瑞希、スマホを握りしめる。

瑞希「全部あなたが捨てたの。一緒に人生を生きていくことを、あなたがやめたの」

実帆「……ごめんなさい」

瑞希「ひとりぼっち？ あなたが人間関係を続けていくことから逃げた結果でしょ」

実帆「あの時、瑞希は私と違って新しい環境で楽しくやってて、瑞希にはもう私は必要ないんだと」

瑞希「必要ないって私たちを捨てたのは実帆でしょ？」

実帆「ごめん。でも私、また瑞希と友達になれたらって」

瑞希「今更なんだよ。何？ そしたらスピー

手代節約になるって？」

実帆「そんなつもりじゃ」

瑞希「打ち合わせは以上です。今後はメールにて当日の段取りを確認させていただきますので」

実帆「ごめん、瑞希。でも私も、あのとさころいろあつて」

瑞希「じゃあいろいろ話してよ！」

瑞希、目に涙を溜めて実帆を見つめる。

実帆「……ごめん」

瑞希「……そんなんだから、結婚式に誰も呼ぶ人がいなくなるんだよ」

実帆、何も言えず出て行く。

### ○ 結婚式場・控室

友哉「いやあ、緊張した！ うまく指輪はめられなかったもん」

実帆「（微笑んで）ね」

友哉「次は披露宴か。楽しみだなあ」

実帆「……うん」

スタッフ、入って来る。

スタッフ「ご準備いかかでしょうか」

実帆「——はい、大丈夫です」

○同・受付

明子「えっと小学校一緒だったんだよね？」

「ごめんなさい、何ちゃん？」

女1「伊藤桃菜です」

女2「大久保里香です」

明子「あー、はいはい。面影あるー！ 綺麗  
になったねえ」

○同・披露宴会場

会場の端で周囲を見渡している辻崎と

瑞希。

辻崎、衣装を着た女たちに指示して  
いる。

辻崎「（小声で）ダンスのメンバーは？ よ  
し、そのまま待機して。名前？ えっと」

辻崎、卒業アルバムを見て、

辻崎「あなたは近藤好美ちゃん」

瑞希「吉田茜ちゃんです」

辻崎「そうだそうだ。みんな、自分の名前忘れないでね。（手を叩いて）解散！」

瑞希「なんで辻崎さんまで出て来てるんですか」

辻崎「一人男性役どうしても捕まらなかったんだよねー」

瑞希「同世代には見えないですけど」

辻崎「ええ？ ダメ？」

瑞希、会場を見渡す。

談笑している友哉の友達たち。

その様子を見ている瑞希。

明子、瑞希に気づいて、

明子「あれ？」

瑞希、慌てて、視線をそらす。

明子、瑞希のもとに駆け寄って来る。

明子「よくうちにも遊びに来てくれてた子だ

よね？ えっと名前が」

瑞希「和田心です」



明子「そうそう！ ごめんねえ、年取ると記憶が」

瑞希「お久しぶりです」

明子「来てくれたのね。嬉しいわあ」

瑞希「（苦笑いして）ええまあ」

明子「……あの子、落ち込みやすいところあるでしょう。それで引きこもって実家にも帰って来ないでね、成人式も出なくて。だからお友達とも連絡取れてるのか心配してたのよ」

瑞希「そう、でしたか」

明子「ずっと友達でいてくれたのね」

明子、瑞希の手を取る。

明子「ありがとうね」

瑞希「……いえ、私は」

明子「じゃあ、また」

明子、自分の席に向かう。

瑞希「……」

○同・廊下

スタッフ「（インカムに）新郎新婦、準備出来ました」

友哉、実帆に微笑む。

実帆、引きつった笑顔で返す。

○同・披露宴会場

司会者「では新郎新婦のご入場です！ みな

さまどうぞ大きな拍手でお迎えください！」

拍手に包まれる会場内。

ドアが開き、友哉と実帆が入って来る。

男の声「友哉ー！」

高砂に向かう友哉と実帆。

友哉、招待席に手を振る。

実帆、招待客を見る。

拍手を送っている人々。

友哉「あは、久しぶり」

実帆、気まずそうに招待客に会釈する。

辻崎・瑞希、拍手を送る。

目が合う実帆と瑞希。

瑞希、無表情で拍手を送っている。

実帆、気まづくなつて目をそらす。

× × ×

ステージで踊るコスプレ姿の男たち。

会場は盛り上がっている。

友哉「（笑つて）あほだ、あいつら」

司会者「ありがとうございます。大いに盛り上げていただきましたね。新郎様の大学時代のご友人方によるパフォーマンスでした」

拍手が起こる。

司会者「さて続きましては、新婦様のご友人によるダンスパフォーマンスです」

ステージにチアガール姿の女たちが上がる。

音楽が流れ、パフォーマンスが始まる。

プロ並みの技が次々と繰り出される。

辻崎「よし！」

友哉「わあ！　すごい！　プロみたい」

苦笑いする実帆。

瑞希「派手じゃないですか？」

辻崎「倉田様には迷惑かけたからね。特別サ

ービス」

瑞希「やりすぎです。不自然ですよ」

辻崎「えっ！」

友哉「実帆の友達ってすごいね！」

実帆「あはは……」

○同・控室

お色直しをした実帆。

ノックの音。

実帆「はい」

辻崎・瑞希、入って来る。

辻崎「失礼しますー」

実帆「あ、どうも」

辻崎「わあ、素敵なドレス。倉田様、先ほど

は大変失礼しました。盛り上がると思った

のですが、少々行き過ぎたようで」

実帆「あ、ああ、はい……」

辻崎「旦那様には友達はアメリカでチアをしているとお伝えください」

実帆「はあ……」

辻崎「次のスピーチはお任せください！もうハンカチ必須ですよ！ねえ、瑞希君」

辻崎、瑞希の肩に手を置く。

辻崎「うちの瑞希君は上手いんですよ。顧客満足度百パーセントですから！」

瑞希、面倒くさそうに辻崎の手を払い

のける。

瑞希「……いつも、本当の友達に読むように、意識してやってるんで。今日も、そういう演技しますよ」

実帆「……」

スタッフ、入って来て、

スタッフ「失礼いたします。そろそろ……」

辻崎「ああ！はい。ではまた」

辻崎・瑞希、出て行く。

実帆、うつむく。

○同・披露宴会場

スタンドマイクの前でスピーチをして  
いる男1。

男1「俺が部活を辞めようとしていた時、友  
哉と一緒に顧問のところに行って、俺のた  
めに頭を下げてくださいました」

涙ぐむ友哉。

男1「本当に、友哉は、一番の友達（言葉に  
詰まる）」

男の声「頑張れー！」

男1「最後になりますが、友哉は、本当にい  
い奴です。実帆さん、俺の大事な友達をよ  
ろしく願います」

男1、実帆に向かって頭を下げる。

男1「愛してるぜ友哉！」

囃し立てる男友達たち。

司会者「ありがとうございました。新郎友哉  
様のご友人、涌井様からのスピーチでした。  
大変胸が熱くなるものでしたね」

スタッフ、友哉にマイクを渡す。

司会者「ご友人からのスピーチを受けて、いかがでしたか？」

友哉「瞬、ありがとう。俺も愛してるぜ！」

拍手が起こる。

司会者「では続きまして、新婦友人代表、和

田心様より。スピーチをお願いします」

友哉「小学校からの友達だっけ？」

実帆「うん……」

実帆、心配そうに瑞希を見る。

瑞希、堂々とスタンドマイクの前に立つ。

瑞希「実帆へ。結婚おめでとう。あんなに小さかった実帆が大人になって結婚するなんて、驚きと喜びでいっぱいです。実帆は体育が得意な、活発な女の子だったことを覚えていきます」

友哉「子どもの頃の実帆ってそんな子だったんだ。可愛いね」

実帆、苦笑いする。

瑞希「運動会ではリレーで活躍していたね。」

赤組を勝利に導く実帆はかつこよかったよ。  
遠足では周りと励まし合いながら、山頂を  
目指したね」

微笑んでスピーチを聞いている明子。

瑞希「実帆は本当に優しい子で、周囲を気に  
かけてくれて。だから今日、こんなに多く  
の友達に囲まれて、お祝いされているんだ  
と思うよ」

辻崎「（小声で）よしここで！」

女の声「実帆ー！」

女の声「おめでとー！」

辻崎「（小声で）完璧」

友哉、微笑んで実帆を見る。

実帆、気まずそうにうつむく。

瑞希「実帆、本当に結婚おめでとー。友哉  
さんと末永くお幸せにね」

瑞希、お辞儀をする。

司会者「ありがとうございました。新婦様の  
小学校からのご友人、和田心様よりスピー  
チを頂戴しました」



拍手が響く。

スタッフ、実帆にマイクを渡す。

実帆、瑞希を見る。

実帆の方を見ていない瑞希。

実帆「……ありがとう、ございました」

拍手が起こる。

司会者「また和田様がスライドショーをご用意してくださったとのことですよ」

会場の照明が落ちる。

実帆「え？」

スクリーンにスライドショーが映し出される。

高校時代の実帆と瑞希の写真が映る。

実帆「これ……」

公園やショッピングセンターで撮られ

た実帆と瑞希の写真。

友哉「えー、初めて見た。高校のときとか？」

実帆「うん……」

辻崎、メモを見ている。

辻崎「こんな段取りあった？」

友哉「ずっと残してくれてたんだね」

実帆と瑞希が笑顔で映っている写真が  
映し出される。

スライドショーが終わり、照明が点く。  
司会者「素敵なサプライズでしたね。いかが  
でしたでしょうか」

マイクを持ったまま黙っている実帆。

司会者「新婦様？」

ざわつく会場。

黙ったまま瑞希を見つめる実帆。

司会者「和田心様にひとこと……」

実帆「瑞希」

実帆、立ち上がり瑞希に向かう。

実帆「今まで、本当にごめんなさい」

実帆、瑞希に頭を下げる。

実帆を見ないままの瑞希、ゆっくりと

呼吸する。

瑞希「……十年だよ。ねえ」

瑞希、実帆を見る。

瑞希「私たち、友達でいた時間より、友達じ

やなくなった時間の方が長くなっちゃったんだよ」

実帆「ごめん」

瑞希「それなのにまた友達に戻れると思う？」

実帆「私は、戻りたい。また、瑞希と友達になりたい」

瑞希「そんな都合よく」

実帆「もう逃げないから。ちゃんと向き合うから。瑞希とも、自分とも」

実帆、小指を差し出す。

実帆「約束する」

瑞希、実帆を見つめる。

実帆「私と、おばあちゃんになっても、ずっと友達でいてほしい」

瑞希、実帆から目をそらし、ステージから降りようとする。

辻崎「瑞希君」

瑞希、辻崎を見る。

辻崎「君は言ったね。僕の仕事に来た時に。いろんな人の友達になってみたいって。そ

したら、本当になりたい人の友達になれるんじゃないかって」

瑞希、席に戻ろうとする。

辻崎「リセットってことは、もう一回初めからやり直すってこともできるんじゃないかな」

瑞希、実帆を見る。

涙を浮かべて瑞希を見ている実帆。

瑞希、実帆の元に向かう。

瑞希「惨めな自分は見せたくないかったって？」

実帆、頷く。

瑞希「楽しそうな私と比べて、会いにくかったって？」

実帆、頷く。

瑞希、実帆を抱きしめる。

瑞希「どんな実帆でも友達にいるに決まってるんじゃない。分かんなかったの？」

実帆「ごめん」

瑞希「ほんっと、実帆って昔からそういうところあるよね」

辻崎、大きな拍手をする。

続けて拍手に包まれる会場。

実帆「本当にごめんね、瑞希」

瑞希「いいよ、もう。しょうがないなあ、実

帆は」

抱きしめ合う実帆と瑞希。

友哉「いい友達だね」

実帆、微笑む。

○レストラン・店内（夜）

ビンゴ大会で盛り上がっている会場内。

半分の座席が埋まっている中、半分は

空席。

その中でぽつんとテーブルについてい

る実帆と瑞希。

瑞希「二次会は呼ばなくてよかったの。お友達」

実帆「うん。延長料金とか深夜料金とか、高くつくし」

瑞希「そう」

ワインを飲む実帆と瑞希。

会場の片側では友哉の友人たちが大いに盛り上がっている。

実帆「——ねえ、瑞希」

実帆、瑞希に婚姻届を差し出す。

実帆「証人になってもらえないかな」

瑞希「私が？」

実帆「もう一人は友哉の友達に書いてもらったの。だから、私も」

実帆、瑞希を見つめる。

瑞希「私でいいの」

実帆「瑞希がいいんだよ。私の、一人だけの友達だもん」

実帆、友哉の友人たちを見る。

大勢の友達と盛り上がっていた友哉、

実帆に気づいて手を振る。

手を振り返す実帆。

瑞希「……ではこちらオプションになりますので別途」

実帆「え！」

瑞希「（笑って）冗談だよ」

実帆「……ありがとう」

瑞希「……うん。サービスね。で、これもサ

ービス」

女三人、会場に入って来る。

実帆「（気づいて）え」

実帆、女たちに駆け寄る。

女3「実帆、結婚おめでとう」

実帆「七海……」

女5「おめでとう、実帆」

実帆「加奈子……」

実帆、手で顔を覆って泣き始める。

実帆の背中を擦る女たち。

瑞希、ワインを飲みながらその様子を

微笑ましく見ている。

赤ちゃんを抱っこした女6、実帆に近

寄る。

実帆「わあ……！」

女6「（赤ちゃんに）ほおら、実帆ちゃんだ

よ〜」

実帆、赤ちゃんに微笑む。

赤ちゃんが実帆の小指を握む。

実帆「初めまして。ママの友達だよ」

(終わり)